第１章 紀州のあけぼのと古代人

米づくりのはじまり

時代区分	
	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和（戦前）時代
	昭和（戦後）・平成時代

米づくりのはじまりと農具

約2,400年前から約1,800年前までの約600年間を　弥生時代といいます。米づくりは，縄文時代の終わりごろ朝鮮半島から北九州地方に伝わり，しだいに東へ広がっていきました。狩猟や採集にたよっていた時代とちがい，米づくりによって食べ物を自分たちでつくりだすことができ，安定した生活がおくれるようになりました。

初めのころの農具は，鉄を使わずすべて木でつくられており，和歌山市太田黒田遺跡，海南市岡村遺跡，御坊市小松原遺跡，堅田遺跡などから，鋤・鍬・竪杵などが見つかっています。また，石でつくられた石包丁も使われています。この時代の終わりごろになると，鋤・鍬・鎌・鏃などに鉄の刃がつけられるようになり，鉄の普及とともに石でつくった道具は使われなくなりました。

木製 鋤（海南市岡村遺跡　和歌山県教育委員会蔵）

弥生人のくらし

水田に近くてあまり　洪水の心配のない少し高いところにむらをつくりました。むらは，外から敵が入ってこないようにまわりを環濠*1や木の柵で囲み，ところどころに門や望楼*2を設けていました。門のなかには，竪穴住居やとれた米を保存する高床倉庫がいくつも建てられており，このあたりをおさめる豪族（指導者）の特別に大きな家や祭りをする建物（神殿）などもありました。水田や墓は環濠の外側につくられました。和歌山市太田黒田遺跡，有田川町田殿尾中遺跡，御坊市堅田遺跡などは，このような環濠集落の跡です。むらの跡からは，壷・甕・高杯・鉢・甑などの弥生土器，石剣・石鏃・鉄鏃などの武器，木を加工する石斧，鋤・鍬・杵・石包丁などの農具，石皿・磨石などの食べ物を加工する道具が見つかっています。

弥生土器　甕
（和歌山市太田黒田遺跡　紀伊風土記の丘蔵）

着物は，からむし，麻，絹などの繊維で織った布でつくられました。一番簡単なものは，布の真ん中に頭を通す穴をあけ，両脇をぬい合わせただけの貫頭衣とよばれるもの

＊1　むらをとりまく濠のこと。
＊2　高い見はり台のこと。

でした。

人が死ぬと，縄文時代と同じように地面に穴をほって埋めましたが，方形周溝墓や*1墳丘墓*2のような特別な墓に埋められる人もあらわれます。なかでも墳丘墓は，100mを超える大きいものものもあります。和歌山県では，方形周溝墓が橋本市柏原遺跡からまとまって16基ほど見つかっています。

石包丁（かつらぎ町船岡山遺跡　和歌山県教育委員会蔵）

銅　鐸

銅鐸は，祭りのときに使われる楽器で，つりさげて揺らすことにより，内部にぶらさげた舌と身がふれて音が出ます。和歌山県では，約30個ほど見つかっています。むらや墓地とはなれた丘の斜面で見つかることが多く，御坊市亀山や日高町荊木では２～３個がまとまって埋められていました。この時代の終わりごろには，つりさげられないほど大きくて重い銅鐸があらわれます。銅鐸は，小さなものから大きなものへ，「聴く銅鐸」から「見る銅鐸」へとかわっていったようです。日高郡や西牟婁郡から見つかった銅鐸のなかには，高さが１mをこえる大型の「見る銅鐸」があり，この時期の銅鐸の多いことが，この地域の特色となっています。

銅鐸（みなべ町雨乞山遺跡　東京国立博物館蔵）

争いがはじまった

水田をつくり，水をひき，米をつくるためには大勢の人々の協力がなければできません。そこで，米づくりや祭りを行うために，むらびとをまとめて指導する人があらわれ，だんだんと力をつけてむらを支配する豪族になっていきました。どんどん水田を広げていくと，土地や水をめぐりむらの間に争いがおこるようになりました。この争いは，話し合いで解決することもありましたが，戦いになることもありました。そのため，弥生時代になるとむらは，そのまわりを環濠や柵で囲む必要があったのです。たくさんの米をたくわえた勢力の強い豪族が，力の弱い豪族を支配するようになり，むらがいくつかあつまって小さなくに（国）が生まれてきました。そして，これらのくにぐにをおさめる卑弥呼のような女王も生まれてきました。

和歌山県でも，この時代の終わりごろになると，和歌山市橘谷遺跡，海南市滝ケ峯遺跡，有田市星尾遺跡のように，水田から離れた高い山の上に移されたむらがあります。このようなむらは，戦いに備えて敵から身を守るためにつくられたもので，高地性集落とよばれており，このころ激しい戦いがあったことがわかります。

＊１　四角形に溝をめぐらし，その内側に溝の土を盛り上げた墓のこと。
＊２　四角形や楕円形や前方後円形に土を盛り上げた墓のこと。